

春日版『五部大乘経』の底本とされた宋版一切経(三)

― 釋音の比較による検討と宋版との相違点 ―

佐々木 勇

(受理日二〇一七年十月四日)

一、本稿の目的・対象資料と研究方法

本稿は、本誌前々号・前号(広島大学大学院教育学研究科紀要)第一部第64号・同第65号、二〇一五年十二月・二〇一六年十二月)掲載の佐々木勇「春日版『五部大乘経』の底本とされた宋版一切経(一)」「刻記の比較による検討」・同「春日版『五部大乘経』の底本とされた宋版一切経(二)」「本文の比較による検討」(以下、合わせて前稿と呼ぶ)につづくものである。本稿をもって完結する。

前稿において、次の二点について、その調査結果を述べた。

A. 春日版『五部大乘経』は、刻工名・帖末刻板数・帖末釋音・捨錢刊記・総字数・帖末記文の宋版刻記を引き継ぐか否か。宋版刻記が有る場合は、どの宋版のものか。(前稿(一))

B. 經本文を比較することで、春日版『五部大乘経』の底本を特定する。(前稿(二))

右の検討から、鎌倉後期刊刻春日版五部大乘経の底本は、次のように推定された。

『大般涅槃経』―東禪寺版補刻本。
『大般涅槃経後分』『大方広仏華嚴経』『大方等大集経(日藏経・月藏経を含む)』『摩訶般若波羅蜜経』―思溪版。

右以外の五部大乘経所収仏典は、日本古写経系本文に依拠したものであるう

(前稿(二)、参照)。

本稿の目的は、次の二点である。

C. 春日版『五部大乘経』の釋音本文を比較することで、底本を特定する。
D. 宋版に基づく春日版『五部大乘経』にも、春日版独自の点は無い。有るならば、それは何か。

この目的を達成するための本稿の対象資料も、前稿同様、左のものである。
【春日版五部大乘経】

愛媛県伊予郡砥部町光明寺藏本、滋賀県大津市北小松樹下神社藏本。

【宋版一切経】

東禪寺版、東禪寺版補刻本、開元寺版、思溪版。

研究対象と研究方法の詳細は、前稿を御覧頂きたい。

二、釋音本文の比較による底本の検討

以下、春日版と東禪寺版・開元寺版・思溪版の釋音を比較する。

宋版に基づくと考えられる經典の内、『大般涅槃経』『大方広仏華嚴経』『仁王般若波羅蜜経』『仏垂般涅槃略説教誡経』の春日版には、帖末釋音が存しない。そのため、本稿では、『大般涅槃経後分』『大方等大集経』『摩訶般若波羅蜜経』および『梵網経』の釋音について、宋版一切経のそれと比較する。

右のうち、『大般涅槃経後分』『大方等大集経』『摩訶般若波羅蜜経』の底本は、

宋版一切経思溪版であることが、前稿の検討で明らかになっている。本稿では、双方の帖末釋音を比較することによって、この点をさらに明確にしたい。

そもそも、中国版本一切経において右の諸経典に帖末釋音を置くのは、思溪版以降のことである。東禪寺版・開元寺版は、釋音を函ごとにまとめ、単独一帖の釋音帖とする。¹⁾よって、釋音本文の比較をするまでもなく、釋音を帖末に置く点のみから、春日版釋音の出典は思溪版であることが判明する、と思われるかも知れない。

ところが、春日版『梵網經』は、宋版一切経以外の本文に依拠することが、經本文の比較からわかっている（前稿（二））。その春日版『梵網經』にも、宋版一切経釋音と同様の釋音が付随している。

したがって、他経についても、經本文とは別の釋音を、本文に続けて彫る可能性を考慮せねばならない。東禪寺版・開元寺版の単独釋音帖釋音を、春日版の当該卷末に付すこともありうる。

右のような事情が存するため、經本文と釋音とを区別し、それぞれの比較を行なう必要が存する。本稿で、春日版と東禪寺版・開元寺版・思溪版それぞれの釋音の比較を行なう所以である。

1. 『大般涅槃經後分』

本經卷上は、光明寺藏本が帖末欠損のため、樹下神社藏春日版五部大乘經を用いる。東禪寺版・開元寺版は、函別に別帖として編集されている釋音帖の当該箇所を対照した。所在は、春日版の卷と釋音の行数で示す。へんは割注である（割注内の改行を示すことは省略する）。東禪寺版と開元寺版とは、ほぼ全同であるため、同一欄に記し、開元寺版が東禪寺版と異なる場合にのみ、の後に開元寺版釋音を記す。以下、同じ。

| | | | |
|------|-------|----------------|-----|
| 所在卷行 | 春日版 | 東禪寺版・開元寺版 | 思溪版 |
| 上1 溺 | 〈奴迪切〉 | 淪溺〈下奴的反——況沒也〉 | （同） |
| 上1 | ／ | 惟付〈下七本反思——〉 | （同） |
| 上1 軀 | 〈去迂切〉 | 碎軀〈上糞對反下丘俱反身也〉 | （同） |
| （中略） | | | |
| 下1 擎 | 〈渠京切〉 | 繪蓋〈上疾陵反吊之摠名〉 | （同） |
| 下1 | ／ | | （同） |

下1

下1 懊

下1 暗

（以下略）

續紛

暗咽

（同）

（同）

本經の春日版・思溪版帖末釋音は、上卷・下卷各三行の簡略なものである。春日版釋音の掲出字はすべて単字であり、注は大部分音注であって、その反切を○○切とする。思溪版も同然である。

これに対し、本經東禪寺版・開元寺版釋音は、上卷二十四行・下卷十二行と詳しい。被注字を熟字で掲げ、反切は○○反とし、義注も付す。東禪寺版・開元寺版の釋音は、掲出字・注文とも全同である。

本經における東禪寺版・開元寺版の釋音が、宋版一切経附載釋音の一般的な形式である。春日版・思溪版でも、他経では本經東禪寺版・開元寺版の形式を採っている（左の『大方等大集經』釋音、参照）。

右のとおり、春日版の本經釋音は、思溪版釋音と完全に一致し、東禪寺版・開元寺版とは大きく異なる。

よって、春日版『大般涅槃經後分』の帖末釋音は、思溪版釋音に依拠したものである。『大般涅槃經後分』が思溪版に基づくという結果は、前稿における刻記および經本文の検討結果と同一である。

2. 『大方等大集經』

右と同様に、春日版『大方等大集經』で帖末釋音が存する巻のうち、第一・三・十（巻第二は「不出字音」）の諸本釋音の異同例を示す。

| | | | |
|----------|-----------|-------------|-------------|
| 所在卷行 | 春日版 | 東禪寺版・開元寺版 | 思溪版 |
| ① 6 嚙咳 | 〈上（略）正作聲〉 | 嚙咳〈上（略）正作聲〉 | 嚙咳〈上（略）正作聲〉 |
| ② 3 4 手釧 | 〈下昌戀反〉 | 手玕〈下亦作釧昌戀反〉 | （同） |
| ③ 5 5 徑 | 〈古定「下路」反〉 | 〈古定反「下路」〉 | （同） |
| ④ 8 1 嬈害 | 〈上音遙「惱」也〉 | 嬈害〈上音遙「惱」也〉 | 嬈害〈上音遙「惱」也〉 |
| ⑤ 8 3 | ／ | 〔印の異体字〕〔印字〕 | （同） |
| ⑥ 8 6 | ／ | 穿〔穿字〕 | （同） |
| ⑦ 8 7 柔濡 | 〈下正〉 | 柔濡〈下正／作軟〉 | 柔濡〈下正／作軟〉 |

⑧九一羸（力垂反）

羸（力垂反）

羸（力垂反）

⑨九二陶師（上音桃）（略）

陶師（上音桃）（略）

（同）

右が、本経釋音の本文異同のすべてである。³⁾
右①④⑦⑧は、春日版の誤刻である。④は、思溪版が卜偏の右一点を省略したため、春日版が人偏として彫ったものである。⑦では、春日版の板木が欠損していたものか、割書二字のみの最終行が印刷されていない。

右四例以外は、春日版と思溪版の釋音は、完全に一致する。思溪版が東禪寺版・開元寺版の字体注を本行に組み込めば、春日版もその通りになる（②⑤⑥）。また、③で「古定反」の反切であることが不明となっているのも、⑨「音桃」を「音桃」と誤るのも、春日版が思溪版に依拠したためである。

右の如く、本経『大方等大集経』釋音でも、春日版は思溪版を下敷きにしてゐる。卷第十一以降も、同様である。

これも、前稿における刻記および経本文の底本検討結果と同じである。

3. 『摩訶般若波羅蜜経』

『摩訶般若波羅蜜経』においても、春日版に帖末釋音が見られる卷第十一・十三～二十の九帖について、諸本を対照した。⁴⁾

所在卷行 春日版

①十四 3 疲苦（上音皮）之

東禪寺版・開元寺版
疲苦（上音皮）之

思溪版
疲苦（上音皮）之

②十四 4 青蓮花黛（云青）花

青蓮花（云青）黛花・
青蓮花又云青黛花

青蓮花（云青）黛花

十五 1

逕耳（上正作經）

（同）

十五 4 輕蔑（下莫結反）也

輕蔑（下莫結反）也正

（同）

山作機

作機

（同）

十六 1 獨獵（同良葉反）（略）

獨獵（同良輒反）（略）

（同）

③十八 1 翅（音施）翼也

翅（音施）翼也

翅（音施）翼也

④二十 2 潛伏（上昨蓋反）（略）

潛伏（上昨塩反）（略）

潛伏（上昨塩反）（略）

二十二 級其（者也）

級其（斬也）

（同）

右のうち、春日版との不一致例①④は、東禪寺版・開元寺版・思溪版がすべて一致していながら、春日版だけが異なる。したがって、春日版の誤刻であろう。④は、思溪版の画が欠けており、「蓋」のごとくに見えるために起きた誤りで

あろう。③は、春日版が、底本の「一」を落とした例である。あるいは、底本では刷りが不鮮明であったものかもしれない。

②の春日版注文「青蓮花黛（云青）花」は、意味不明である。これに対応する東禪寺版は、掲出字「瀕鉢」の注文中、「青蓮花」に続く注文を割書にする。同一箇所を、開元寺版は、割書にすることなく、続けている。⁵⁾その違いはあるものの、当該箇所は、「青蓮花」を「青黛花」とも言うことを注している。思溪版は、東禪寺版「一云・開元寺版「又云」の「一」・「又」を落として空白とする。春日版の「青蓮花黛（云青）花」は、思溪版の空白を詰め、次行頭の「黛」を本行に組み込んだ例である、と解される。この事例は、思溪版に依らない限り、生じない。

したがって、『摩訶般若波羅蜜経』においても、春日版は思溪版釋音に基づいた刻版であった、と考えられる。

本経も、前稿における刻記および経本文の底本検討結果に等しい。

4. 『梵網経』

はじめに記したとおり、春日版『梵網経』本文は、宋版を底本としていない。ところが、春日版『梵網経』卷下帖末には、釋音が存する。

宋版一切経『梵網経』釋音の内容は、東禪寺版・開元寺版・思溪版に異同がない。しかし、東禪寺版・開元寺版釋音末の「折骨（上先擊反）」を、春日版は「折骨（上先反）」と、一字分空白にする。これは、思溪版での反切下字「擊」が摩滅しているためであると考えられる。

よって、春日版釋音は思溪版の帖末釋音に基づくかと判断される。

以上、帖末釋音本文の比較からも、宋版に基づくと考えられる經典の内、『大般涅槃経後分』『大方等大集経（日藏経・月藏経を含む）』『摩訶般若波羅蜜経』が思溪版に基づくことを確認できた。

ただし、『梵網経』の経本文が宋版に基づかないことは、前稿（二）で述べたとおりである。春日版『梵網経』は、その卷下卷末に、宋版思溪版の釋音を追加したものである。

三、春日版と底本宋版との相違点

―春日版の削除・追加・改変―

前稿(一)に掲げた、春日版に見られる宋版の捨銭刊記・刻工名・帖末刻板数等は、底本宋版に存するものごとく一部を反映したに過ぎない。それらは春日版の開版とは無関係なのであるから、当然である。

また、前稿(一)に記したごとく、春日版五部大乘経の経本文は、底本として宋版の完全覆刻本ではない。

その他、春日版五部大乘経は、宋版を底本とする諸経においても、以下の点で、底本の宋版と異なる。

1. 一板の行数

宋版一切経の東禪寺版および開元寺版は、六行の纏まり六つ計三十六行一板を基本とする。

しかし、宋版思溪版は、六行の纏まり五つ、計三十行を一板とするのが基本である。

ただし、思溪版においても、第一秩千字文天より始まる『大般若波羅蜜多經』巻第一―巻第二百二十まで、および、千字文坐(第百五帙)より始まる旧約『大方広仏華嚴經』全六十巻は、一板六面三十六行である。

春日版『五部大乘経』は、比較的多くの經典底本とした思溪版における主たる版式である一板五面三十行に従わず、全経等しく、六行の纏まり六つ計三十六行で一板を成す。

これは、なぜであろうか。
今、春日版が底本とした宋版經典を、一板の版式によってまとめると、左のごとくになる。

〈一板六面・全三十六行〉

『大方広仏華嚴經』六十巻(思溪版)

『大般若波羅蜜多經』四十巻(東禪寺版補刻本)

〈一板五面・全三十行〉

『大方等大集經(日藏經・月藏經を含む)』五十巻(思溪版)

『摩訶般若波羅蜜經』三十巻(思溪版)

『大般若波羅蜜經後分』二巻(思溪版)

右のように、一板六面・全三十六行の経が百巻、一板五面・全三十行の経が八十二巻で、巻の総数では一板六面・全三十六行版式が勝る。春日版は、底本とした宋版中に多くの帖を占める版式に合わせたのであるまいか。

2. 版面の大きさ

文字面の大きさを測ってみる。

東禪寺版・開元寺版および一板六面の思溪版は、一板六面の文字面横は、約六十六cmである。字面高は、約二十五cmである。

これに対して、一板六面の春日版は、文字面幅約六十cm、字面高は約二十三cmで、宋版よりも小ぶりである。

よって、春日版『五部大乘経』は、宋版の被せ彫りや、敷き写しの本文に基づき製板ではない。

3. 紙長

春日版の一紙長は、約四二cmである。紙の継ぎ目に文字が跨っていることから、紙を継いでから印刷したことが知られる。

これに対して、宋版は、板毎に一板一紙で印刷するため、東禪寺版・開元寺版および思溪版『大方広仏華嚴經』の一紙(二板六面)は七十cm弱、『大方広仏華嚴經』以外の思溪版(一板五面)は五十六cm程度であり、春日版と異なる。

4. 天地の界線

本稿の対象とした春日版五部大乘経は、東禪寺版・開元寺版・思溪版の宋版一切経に存する天地の界線を一切引かない。この点は、平安後期以降の伝統的な春日版の書式を継承している。

5. 内題・尾題下の千字文

宋版一切経は、内題・尾題下に千字文号が彫られることが、特徴の一つである。宋版に基づく日本古写経も、その千字文を写すことがあり、それが底本推定の手がかりとなる。

春日版五部大乘経も、底本宋版の千字文を写している。しかし、もとの千字文を梵字に変更した帖が存する。

6. 柱刻

春日版『五部大乘経』は、前記の如く、一板三十六行から成る。

その一板に、必ず一行の柱刻が彫られている。その柱刻は第一の纏まり（第一面）と第二の纏まり（第二面）との間（六行目と七行目との間）に彫られるのが原則である。この点は、東禪寺版・開元寺版と一致し、思溪版とは異なる。以下、春日版の柱刻と底本宋版のそれとを、経ごとに比較してみる。

○『大般涅槃経』

左に、春日版と東禪寺版（書陵部藏補刻本）とにおける、『大般涅槃経』の巻第六十（光明寺藏卷第一）五欠帖のため）第二板の柱刻を掲げる。第一板の柱刻は、しばしば省略されるため、第二板の柱刻を比較する。

| 卷 | 春日版 | 東禪寺版（書陵部藏補刻本） |
|----|-----|-----------------------|
| 六 | 六卷 | 二 中 |
| 七 | 七卷 | 二 二 |
| 八 | 八卷 | 二 二 僧 崇珩捨 賜刀 |
| 九 | 九卷 | 二 二 仲 建府劉穗爲母親黃四娘捨 |
| 十 | 十卷 | 二 二 文 南劍州福興禪院尼膳海捨五片 仁 |
| 十一 | 十一卷 | 二 二 文 |
| 十二 | 十二卷 | 二 二 南劍州福興禪院尼膳海捨五片 仁 |
| 十三 | 十三卷 | 二 二 【住神光宗浩捨 |
| 十四 | 十四卷 | 二 二 澤 |
| 十五 | 十五卷 | 二 二 戊子 傑 |

右の如く、春日版の柱刻は、東禪寺版の刻工名・捨錢記等を省略し、簡略化したものと見られる。

○『大方広仏華嚴経』

春日版『大方広仏華嚴経』も、一板三十六行ごとに、第六行と第七行との間に、「坐 花嚴卷一 二二（第一卷第二板）の如く、柱刻を彫っている。

一方、底本の思溪版『大方広仏華嚴経』も、一紙六面を基本とする。

しかし、原則として第七紙に、五面の一紙を挟む。各板柱刻は、五面の一紙までは、第一面と第二面との間に彫られる。五面一紙の次紙（希にその五面一紙）以降は、紙端または第二面と第三面との間に柱刻が移動する。この点、春日版のように一様ではない。

○『大方等大集経』

本経でも、底本思溪版『大方等大集経』の柱刻は、五面一紙の右端に彫られ、紙継ぎで下側にされるため、表面からは見えない。

これに対して、春日版『大方等大集経』は、三十六行に一つの柱刻を、第六行と第七行との間に、終始刻している。

○『摩訶般若波羅蜜経』

『摩訶般若波羅蜜経』は、巻第一～第十の各巻第二紙の柱刻を、底本思溪版柱刻および磧砂版のそれと対照して示す。

| 卷 | 春日版 | 思溪版 | 磧砂版 |
|---|---------|------------|---------------|
| 一 | 一 一 | 一 一 嚴氏 | 一 一 摩訶一 二 |
| 二 | 二 二 | 二 二 于 | 二 二 姜 摩訶二 二 義 |
| 三 | 三 三 卷 二 | 三 三 卷 二 盧 | 三 三 薑 摩訶三 二 |
| 四 | 四 一 四 二 | 四 一 四 二 牛志 | 四 一 四 二 游 |
| 五 | 五 薑 五 二 | 五 薑 五 二 盧 | 五 薑 五 二 徒 |
| 六 | 六 一 六 二 | 六 一 六 二 盧 | 六 一 六 二 有 |
| 七 | 七 七 二 | 七 七 二 盧 | 七 七 二 二 |
| 八 | 八 八 卷 二 | 八 八 卷 二 盧 | 八 八 卷 二 二 |
| 九 | 九 九 二 | 九 九 卷 二 寶 | 九 九 卷 二 二 |
| 十 | 十 卷 二 | 十 卷 二 寶 | 十 卷 二 二 |

右の通り、本経においても、春日版の柱刻は、底本思溪版のそれを参照しつつ簡略化したものと見られる。

しかし、思溪版『摩訶般若波羅蜜経』では、巻第一～巻第十までは、一板六行五面（全三十行）ごとに、第一面と第二面との間と、第二面と第三面との間とに、交互に柱刻が現われる。これは、柱刻が帖装の山となることを避けるための工夫である。

そして、思溪版『摩訶般若波羅蜜経』巻第十一～三十までは、紙の右端に柱刻が存するため、紙継ぎによって柱刻は見えない。

これに対し、春日版『摩訶般若波羅蜜経』の柱刻は、六行の纏まり六つ（一板三十六行）に一つの柱刻が、第六行と第七行との間に全三十巻一貫して彫られている。思溪版の柱刻が表面から見えない巻第十一以降も、春日版では一板三十六行に一つの柱刻が刻まれる。

よって、春日版『摩訶般若波羅蜜經』の柱刻も、思溪版の形式を参照しつつ、独自に付されたものである。

以上、春日版五部大乘經の柱刻は、本稿の対象としたすべての經典において、原則として、一板六面・一面六行の第一面と第二面との間に刻されている¹⁶⁾。その柱刻は、東禪寺版や思溪版の柱刻を参考にし、五部大乘經内で統一的に簡略化したものである。

7. 帖末刻板数

右の刻工名等と同じく、春日版五部大乘經に、底本宋版の帖末板数をそのまま彫ったものが有る(前稿、参照)。しかし、すでに述べたとおり、宋版と春日版とは版式が異なることから、宋版の帖末板数は、春日版の実板数と一致しない場合が有る。

そのため、中には、宋版の板数ではなく、春日版の実質板数を刻したものが有る。

例えば、一板六面で通されている春日版『大方等大集經』卷第十五は、春日版の最終板数「十九」を帖末に刻す。この帖末板数「十九」は、思溪版当該帖には見られない。一板五面三十行の思溪版『大方等大集經』卷第十五は、全二十二板である。

8. 卷末刊記

春日版が底本とした東禪寺版『大般涅槃經』に題記は存しない。しかし、卷末刊記は見られる。ところが、春日版は、この「勸首住持傳法慧空大師 沖真」等の卷末刊記をまったく彫っていない。

この『大般涅槃經』卷末刊記は、東禪寺版においても、醍醐寺藏本と書陵部藏補刻本とは、差がある。

醍醐寺藏本は、全四十卷のうち、卷第三十三・第三十九の二巻が欠帖である。それでも、三十八帖中二十三の帖末に卷末刊記が見られる。

これに対し、書陵部藏補刻本東禪寺版『大般涅槃經』では、全四十巻中、二巻にしか卷末刊記が存しない。書陵部藏補刻本東禪寺版『大般涅槃經』は、板木に存する卷末刊記を摺り出さないようにしたものと考えられる。

春日版『大般涅槃經』本文は、この補刻本東禪寺版に基づくのであった(前稿参照)。しかし、春日版『大般涅槃經』に卷末刊記は彫られていない。二巻

分とはいえ、依拠本に存した刊記を彫らなかつたのは、意図的な所為であろう。

9. 刻工名・捨錢刊記・総字数・帖末釋音

前稿で、底本推定の手がかりとした刻工名・捨錢刊記・総字数等の宋版刻記も、宋版に存するものすべてを春日版が彫刻しているのではない。

前稿(一)では、春日版に彫られた僅かな宋版刻記を頼りに、東禪寺版補刻本あるいは思溪版に基づくことを推定した。

それら少数の刻記が、なぜ残ったのであろうか。すべてを削除しようとしながらも、それが徹底しなかつたのか。あるいは、全体の方針は無く、各刻工による無意識の作業結果なのか。現段階では、不明とせざるをえない。

10. 日本古写經系本文による校合・改訂

春日版『五部大乘經』は、依拠した宋版本文によって製版した後、日本古写經系の本文による校合を経て、本文を改訂している。この点については、前稿(二)および勇木々々「春日版『五部大乘經』本文と底本選択理由」(国際仏教学大学院大学附置日本古写經研究所編『日本古写經研究所研究紀要』第2号、二〇一七年三月)に具体的に記した。それらを御参照願いたい。

四、結び ― 春日版『五部大乘經』が底本とした宋版一切經 ―

以上、「春日版『五部大乘經』の底本とされた宋版一切經」と題し、三回に分けて述べてきた。これら一連の拙稿は、鎌倉後期に開版された春日版『五部大乘經』の底本を特定することを目的としていた。

その目的達成のため、次の方法を採用した。

1. 春日版に見られる刻工名等の刻記を抽出し、それらを宋版一切經諸本の刻記と比較する。(前稿(一))

2. 春日版の經本文を、宋版一切經諸本と比較する。(前稿(二))

3. 春日版の帖末釋音を、宋版一切經諸本と比較する。(本稿)

これらの比較の結果、そのすべてにおいて、同一の結果が得られた。

すなわち、鎌倉後期開版春日版『五部大乘經』のうち、『大般涅槃經』は東禪寺版補刻本、『大般涅槃經後分』『大方広仏華嚴經』『大方等大集經(日藏經・月藏經を含む)』『摩訶般若波羅蜜經』は思溪版に基づくことが確実になった。

また、本稿では、宋版に基づく春日版『五部大乘経』に春日版独自の点は無いか。有るならば、それは何か。という問題を設定し、春日版とその底本宋版との相違点を、十項目に亘って指摘した。相違の内容は、すでに記したとおりである。春日版は、底本とした宋版の書式変更、項目の削除・追加・改変を行なっている。加えて、春日版は、経本文においても、底本の宋版経本文を伝統的な古写経本文によって改変している。

さらに、前稿(二)で述べたとおり、春日版『五部大乘経』には、宋版に依拠しなかった経も含まれる。これによって、春日版『五部大乘経』の編纂時に、隋唐写経あるいはそれらに基づく伝統的な日本古写経と宋版諸本とを対照させた、底本選定が行なわれたことが推測される。

こうした本文検討を経て取り込まれた宋版の、日本経典への影響は、決して小さなものではなかった。

宋版一切経の移入は、『五部大乘経』についても、第一種(全二〇五卷・二〇九卷)から第二種(全二〇〇卷)への転換を、鎌倉時代にもたらした。これは、日本古写経系から宋版系への転換である。本稿の対象とした春日版『五部大乘経』は、この宋版系へ転換した後のものである。

しかし、編成転換後の第二種(全二〇〇卷)『五部大乘経』は、宋版一切経から当該写経本文をそのまま抜き出したものではない。古来八巻で伝えられてきた『妙法蓮華経』を、宋版に合わせて七巻仕立てにすることはなかった。春日版『妙法蓮華経』は、字形も書写体であり、宋版を模した版心記も存しない。『妙法蓮華経』の開結経である『無量義経』『観普賢経』も、同様である。さらに、五部大乘経中、宋版一切経に入蔵されない疑経『像法決疑経』は、宋版に依るべくもない。

この全経典の精髓を集めた『五部大乘経』の刊刻にあたり、春日版は、当時最新の宋版に基づく書式・本文を取り入れつつ、伝来古写経本文をも活かした。ここに、日本文化の継承と展開の精神をうかがうことができる。

【注】

(1) 『醍醐寺蔵宋版一切経目録』(二〇一五年、汲古書院)等、参照。なお、開寶蔵に釋音が存したものが否かは、残存資料からは不明である。

(2) 「不出字音」は、宋版釋音に彫り込まれた言葉である。不出字音とは、「釋

音」を付すべき漢字・漢語が無いと判断されたため、当該巻の「釋音」は無、という意味である。不出字音という用語から、釋音の中心は、義注・字体注ではなく、音注であることが確認される。

(3) 卷第四・六・七・十の釋音は、諸本全同であった。

(4) 前稿に既述の通り、卷第十二は思溪版にも帖末釋音が無い。東禪寺版および開元寺版釋音帖でも「不出字」として、卷第十二には釋音が無い。

(5) 当該例は、東禪寺版と開元寺版の釋音が異なる。一方、開元寺版に出版が遅れる思溪版は、東禪寺版と同じく、割書としている。思溪版の帖末釋音作成過程を知る、重要な例かと思われる。

(6) 『奈良県大般若經調査報告書 一本文篇』(同) 資料篇1 (一九九二年、奈良県教育委員会、牧野和夫「関於宋版大藏經中」一版五半葉三十行。版片的考察) (藏外佛敎文獻) 第十四輯、二〇一〇年八月、同右「高野山金剛峯寺蔵『四分律藏』(宋版大藏經ノ内)について」(かがみ) 第四十二号、二〇一二年三月)、『豊山長谷寺拾遺 第四輯之一 宋版一切経』(二〇一一年、佐々木勇「宋版一切経思溪版の版式転換——一紙六面から一紙五面へ——」(いとくら) 10号、二〇一五年三月)、参照。

(7) 詳しくは、土居聡朋「愛媛県伊予郡砥部町光明寺所蔵・版本五部大乘経について——元版覆刻和版五部大乘経の一事例として——」(愛媛県歴史文化博物館研究紀要) 第十二号、二〇〇七年三月)を御覧いただきたい。

(8) 佐々木勇「尊氏願経と宋版一切経思溪版」(「Museum」) 69、二〇一五年十二月)、同「足利尊氏発願一切経の底本」(「かがみ」) 第四十六号、二〇一六年三月)、等参照。

(9) この点は、注(7) 土居論文に指摘がある。

(10) しかし、一卷第二・五・八・九・十二・十四・十九では第八紙、卷第三・四・七では第九紙、卷第六・十七・二十・二十一・二十四では第十紙を五面とし、卷第十五・二十二では五面の一紙を挟まず、卷第二十四までは安定しない。また、全十八紙の卷第五十四では、第九紙を五面とする。

(11) これは、柱刻が帖装の山となることを避けるための工夫である(佐々木勇「宋版一切経東禪寺版に五面の一紙が挿入された理由」(広島大学教育学研究紀要) 第二部第63号、二〇一四年十二月)、参照。なお、希に、五面の一紙以降も第一面と第二面との間に柱刻を彫る版も有り、その紙では柱刻が山の位置となる。

- (12) 思溪版は一板五面、春日版は一板六面であるため、柱刻は一致しない。たとえば、『月藏経』巻第四の最終紙は、思溪版では第十六板（柱刻に「十六」と見られる）、春日版は第十三板（柱刻「月 十三」）である。
- (13) ただし、右紙端・紙継ぎ位置の柱刻も混じる。巻第十一は、すべて紙継ぎ位置の柱刻である。また、第五面と第六面との間に存する柱刻も見られる。
- (14) 佐々木勇「宋版一切経東禅寺版に五面の一紙が挿入された理由」（『広島大学教育学研究科紀要』第二部第63号、二〇一四年十二月）、参照。
- (15) 中間に五面の一紙が挿入されることも、無い。これは、宋版と異なり、春日版の紙継ぎが紙の折目と一致しないため、紙継ぎが帖装の片側に偏ることが無く、紙継ぎ位置を変更する必要が無いためである。春日版五部大乘経は、本

- 来、卷子装であった。春日版五部大乘経の原装が卷子であったことは、川瀬一馬「樹下神社蔵佐々木崇永開版の大般若経 附、同蔵春日版五部大乘経ほか」（『かがみ』第二十号、一九七六年三月）等、参照。
- (16) まれに、第五面と第六面との間に柱刻が見られる板も存する。
- (17) 詳細は、佐々木勇「春日版『五部大乘経』本文と底本選択理由」（『国際仏教学大学院大学附置日本古写経研究所編「日本古写経研究所研究紀要」第2号、二〇一七年三月刊行予定）を御覧頂きたい。
- (18) 佐々木勇「鎌倉時代における『五部大乘経』構成経の転換に見られる宋版一切経の影響」（『鎌倉遺文研究』第38号、二〇一六年十月）、参照。
- (19) 春日版五部大乘経中の『像法決疑経』については、別稿を準備中である。

The South Song Dynasty Edition of the Buddhist Canon (宋版一切経)
Which Became Original Text of Kasuga Prints (春日版)
the Five Mahayana Sutras (五部大乘経) (3)
— Comparison in Shakuon (釋音), and the difference with Sung edition —

Isamu Sasaki

Abstract : The Five Mahayana Sutras (Hoke-kyo (法華経 the Saddharma Pundarika Sutra), Kegon-kyo (華嚴経 the Avatamska Sutra), Nehan-kyo (涅槃経), Daijiki-kyo (大集経), Daibon hannya-kyo (大品般若経)) were printed at Kofuku-ji (興福寺) in Nara. Those were called Kasuga prints (春日版). Those were printed in the latter period in Kamakura era. The purpose of this thesis is to specify a dependence book of the Five Copies of Mahayana Sutras. The next things were found by this thesis.

1. A dependence book of Nehan-kyo (涅槃経) is Touzenji-ban hokokubon (東禪寺版補刻本).
2. A dependence books of Kegon-kyo (華嚴経), Daijiki-kyo (大集経) and Daibon hannya-kyo (大品般若経) are Sikei-ban (思溪版).

However, I also found out that the difference between Kasuga edition and the South Song Dynasty Edition of the Buddhist Canon. About this difference, I wrote it down in this article.

Key words: the South Song Dynasty Edition of the Buddhist Canon, the text of Kasuga prints, the Five Mahayana Sutras, the old copied sutras in Japan

キーワード : 宋版一切経, 春日版, 五部大乘経, 日本古写経